

国内研修レポート 住宅型老人ホーム利用者の暮らしの自由について

1 はじめに

世界に例をみない超高齢化社会を目前に控え、現在の日本は多くの問題を抱えながらよりよい高齢者の暮らしを模索している。人生の終末期まで高齢者に尊厳のある豊かな生活を提供するために、従来の集団ケア型施設以外にも、高齢者福祉サービスの選択肢はますます多様化している。

2018年8月上旬、我々が約1週間滞在した研修先『エスプリ鹿児島あいら』(以下、本施設)は、平成30年3月に創設されたばかりの住宅型老人ホームである。住宅型老人ホームとは老人ホームの機能と一般的な住宅の機能を併せ持つという特徴があり、利用者の暮らしの安全面をサポートするだけでなく、利用者個人の意志や要望を尊重する姿勢も重視している。今回の研修で我々は、他施設の比較も交えながら、本施設での活動を通して高齢者福祉の実態を調査した。

2 研修内容について

我々は本施設において、日々の職務の見学、普段のデイサービスやレクのサポート、大学生のみのレク企画・運営を通じて職員に近い立場を体験しつつ、その一方で利用者と共に参加するデイサービス、日々の談話や傾聴によって重ねた交流から、高齢者一人ひとりの生活の在り方についても考察を深めた。施設職員の視点と利用者の視点の双方にアプローチすることで、我々はより俯瞰的な高齢者福祉の実態を調査できたのではないかと考えている。

日々の職務の見学・体験として、具体的には8月2日にはグループワークや研修会に参加し、また近隣の特別養護老人ホーム『マモリエあいら』を3日に、小規模多機能ホーム『さざんか』を6日に訪問した。

普段のデイサービスの中ではカラオケ大会や体操の時間が設けられていた他、折り紙や絵描きなどの自由な創作の場が提供されることもあった。我々は場面に応じて施設職員のサポートをしつつ、多くの時間を利用者と共にレクに取り組みながら過ごした。

学生のみが運営した企画の中で最も主体的・積極的に取り組んできたものは、着想段階から数か月間に渡り準備を積み4日に開催した『第一回エスプリあいら夏祭り』であった。またその他には8日に利用者と共にサラダうどんを作る企画を立ち上げ、9日と10日に我々が手話サークルに所属しているという特徴を生かして手話教室を開催した。

3 - 1 調査結果 - 住宅としての機能、内装や設備について

研修以前に、高齢者にとって親しみやすい環境に身を置くことがどれほど重要か、ということについて『プラスチックの無機質なコップではなく各自が慣れ親しんだ家庭の湯飲みを使うことで高齢者の食欲が好転し、健康状態も回復してゆく』という内容の調査結果を読んだことがあった。この調査は効率重視の集団ケアを批判し、住宅での暮らしをより良いものと捉えて執筆されていた。慣れない環境に身を置くことは誰にとっても疲労や負

担を伴うものであるが、とりわけ高齢者は同じ環境で過ごしている月日が長い傾向にあり、また若年層以上に心理的な要因が身体の健康状態に影響を及ぼしやすい。そのため高齢者にとって環境の変化は軽視できないものなのだろうと私は考えていた。

本施設にはデイサービス用の広間、食堂・談話コーナーなどの共用スペース以外に、利用者一人ひとりに居室が確保されており、我々は研修期間中入居者のいない居室に実際に宿泊することで、利用者の生活環境を疑似体験させていただいた。私は居室の内装を観察し、段差のない引き戸、低く設置された洗面台、押し易い照明ボタン、手すりのあるお手洗いなど、バリアフリー化の進んだ箇所を多く確認した。

しかし私が本当に感心したのはその後、実際に入居者の暮らす居室を覗かせていただいた際であった。基本的な内部構造はどの居室も同様だが、そこには利用者がかつて自宅で使っていたと思われる家具や私物が自由に配置され、結果プライベートスペースが確立しており、一時的に利用している我々の居室とは全く印象が異なる場所になっていたのだ。改めてその様な観点から居室のつくりを観察すると、私物を持ち込みやすい様に付属の家具が最小限に抑えられている点、夫婦で入居している利用者には二人部屋を提供し家具を共有できる様にしている点などが、施設側の工夫として追って把握できた。

更に利用者の持ち物を観察していると、私物の手押し車に夏祭りで提供した景品がぶら下がる様子や、居室に日々のレクの創作物が飾られている様子も確認でき、この施設内での出来事が利用者の私物を通じて馴染みの環境の一部となり、自宅から施設への適応が緩やかに進められているのだということが理解できた。これは従来の高齢者施設として想像されがちな効率優先のサービスにはない細やかな配慮であり、利用者一人一人のプライバシーや個性を尊重しているこの施設の姿勢が表れていると感じた。

また他施設の要所にも、異なる形で親しみやすさを追求した結果が見られた。特別養護老人ホーム『マモリエ あいら』では、図書館や喫茶店などの役割が付してある共用スペースがあり、そこに備え付けられる家具や配置される小物の選び方によって、ある意味でありふれていて馴染みのある空間が作り上げられていた。小規模多機能ホーム『さざんか』は古風な雰囲気漂う木造建築とそれに合わせた内装により、昔ながらの温かみある住宅を演出していた。他施設を参考にするなら、本施設の共用スペースや廊下や壁はまだ改良が可能だろう。

3 - 2 調査結果 - 施設としての機能、提供するサービスについて

高齢者の定義は年齢に準拠するが、同年齢であっても数十年の蓄積により性質には個体差が大きく、一貫した特徴を見ることが難しい。高齢者の身体機能や認知機能の衰えは一見幼い子どもに戻ってゆく様にも映るが、実際には健康状態や疾病などの身体の個人差だけでなく、各々が培ってきた人生経験によって生じる嗜好の個人差が大きく、柔軟な支援が必要である。これが高齢者福祉の大きな特徴であると私は考えている。

本施設のデイサービスのレクに参加した際に私が一番驚いたのは、予想以上にレク参加者が少なかったことである。この点に関して、7日に行ったそうめん流しが印象に残っている。私は当日準備を進めながら、利用者全員にレクを楽しんでいただきたいと思っていたが、実際に参加者を募ると名乗りを上げたのは全体の1割2割程度であった。多くの利用者はただ前方に設置されたそうめん流しコーナーを見るだけであり、中には全く見向きもしない人もいた。そうめん流しに参加しない利用者には、盛り付けられた普通のそうめんが配膳されていた。

参加の有無は利用者の自由であり、正にこれが『個人差』の結果と解釈する職員もいた。名乗り出る利用者が少なかった本当の理由は私には分からないが、参加者の少なさを個人差でまとめるよりは、より多くの人により多くの楽しみ方を提供できる企画を再考する方が有意義だろうと私は考えている。そうめん流しを「やりたくない」と感じた利用者が多かったなら着想段階から見直す必要があるだろうし、「やりたいけどできない」と感じた

利用者が多かったなら高齢者にも楽しみやすいアレンジを加えるべきである。

例えば、もっと長い竹樋を用意するなど設置場所を工夫していれば、車椅子で動きづらい利用者にも参加してもらえるだろう。細い麺が取りづらいなら麺の種類を変えても良いし、箸が使えない利用者にはフォークを用意すべきだ。あるいは食べやすくカットした果物を流せばスプーンだけで気軽に参加できるし、カラフルなゼリーやアイスを掬う仕組みにしたなら、手の不自由な利用者も視覚だけで楽しめるかもしれない。市販のそうめん流し器を各テーブルに設置しそこから施設職員や学生が目の前でそうめんを取り配膳する仕組みにしたなら、誰かが麺を取る過程で会話が生まれ、参加した気分を味わえるかもしれない。また最初は名乗りをあげなかったが見ているうちに参加したくなる、という利用者もいたかもしれない。

私は利用者を強制的にデイサービスに参加させたいのではなく、多くの利用者が参加したいと思える企画ができなかったことを残念だと感じていた。高齢者施設の魅力は、一家庭では中々催すことのできない豊富なレクの機会が、高齢者のために設けられているという点にある。利用者の身体機能や体調、好みにできるだけ寄り添った企画を提示することは施設の重要な役割だと思うのだが、現時点ではそれを配慮せず進行してしまった企画も多い様であった。

3 - 3 調査結果 - 高齢者の心理、多世代交流の重要性について

『利用者』と『施設職員』という関係しか存在し得ない施設内において、高齢者は常に介護の対象であり、お客様であり、弱者である。そのため利用者はサービスを受けることに慣れて、受け身の生活を送ってしまいがちだと私は感じていた。しかし施設職員以外の人々と接する機会を設けた時、高齢者は別の人間関係の中で新たな役割を持つことができる。その様子を私は多世代交流の中で発見した。

4日に開催した『第一回エスプリあいら夏祭り』は利用者のご家族にも声をかけた結果、多くの世代が参加する大規模なイベントとなった。その際に多く見られたのが、ゲームの景品や食べ物をプレゼントし合う利用者とその家族の姿であり、利用者が夏祭りに主体的に参加している姿は印象に残ったという学生が多かった。普段のデイサービスの中にも景品のあるゲームや美味しいものを食べる機会はあったが、それを施設外の人とこれほど鮮明に共有できる機会はなかつただろう。

利用者家族にも自身の生活があり、頻繁に施設を訪れて利用者の生活の様子を共有することは現実的には難しい。施設職員からは「夏祭りの企画が始動する前は、(転倒や急病などの暗い内容ではなく)明るい内容でこちらからご家庭に連絡する機会は少なかつた」との意見もあがった。しかし介護被介護の関係を抜けて、人間性や経験の蓄積も含めたリアルな人間関係の中に戻り、『子』に対する『父母』、また『孫』に対する『祖父、祖母』という役割の中で利用者がやり取りをする機会は彼らをより主体的にレクに参加させるのではないだろうか。今後このようなご家族との交流の場を積極的に設けてほしいと私は思っている。

また『施設職員』とも『家族』とも異なる立ち位置から、我々学生は一週間程度の滞在の中でも利用者の多くの顔を見ることができたと私には考えている。利用者にとっての我々学生というのは、立場上は施設職員に近いが明らかに職員より未熟な存在であった。また年齢的には子どもや孫に近いが、利用者のことを深く存じ上げない『よそ者』でもあった。

4日の夏祭りの際、学生の担当する屋台では不手際により商品提供が滞ることもあったが、多くの利用者は寛大な心で我々を赦していた。我々が施設を訪れる以前は職員に対し怒りっぽかつたという利用者も、学生の企画したレクには終始穏やかに参加していた。利用者は施設職員との関係の中で常に『赦されるべき存在』であったため、彼らにとっては未熟な我々を赦す経験自体が新鮮だったのかもしれないと私は考えている。8日のデイサ

一ビスでうどん作りをした際には、料理慣れしていない学生を見かねた女性利用者から、麺の切り方やこね方について本当にたくさんの助言をいただいた。利用者の安全面に配慮し包丁は我々が握っていたが、『元主婦』という人生の先輩の立場で発言する彼女たちはとても頼もしく威厳がある様に思えた。日々の傾聴や談話において利用者一人ひとりの話題はさまざまであったが、鹿児島島の歴史や名所について、自身の学生時代について、家族との思い出についてなど、各々が語りたことを引き出すには『よそ者』という立場は有効であった。

人間は相対的に他者を認識することで自分のことをより一層深く理解することができる。たとえ施設の中で快適に暮らすことができても、『介護を受ける者』という受け身の立場しか用意しなければ利用者の人生に張り合いがなくなってしまうのではないだろうか。このような多世代交流の場面が、利用者を様々な人間関係の中に身を置き、更に彼らの人生を豊かにするのではないかと私は考えている。

4 まとめ

私が想像していた以上にあらゆる高齢者施設が利用者の尊厳を重視した個別ケアを目指していた。その模索の結果として現在多様な形態の高齢者施設が存在するが、高齢者の個人差の大きさを考えれば、理想の施設の形態を一つに絞る必要はないと私には思える。各施設が各施設の長所を生かしながら、参考にできる部分があれば他施設の長所も取り入れていく、という姿勢により更に質の高いサービス提供を見出すことの方が重要ではないだろうか。

今回の研修では本学の講義の中で学んだ知識を実際に現場で生かすことが出来たという面でも、また座学では学べない高齢者施設の実態を知ることが出来たという面でも、大変有意義な経験になった。私個人の変化として、多くの利用者との傾聴や談話を通じて利用者一人ひとりの個性を把握できる様になり、最終的には話題の選び方や相槌の打ち方も利用者の特性によって変えられたことは成長と思える一点である。また約1週間に及ぶ遠地の研修を無事に終えることができたという達成感は今後の自信に繋がるだろう。ここに記しきれなかった多くの経験も、福祉に携わるうえで今後積極的に生かしていきたい。

結びに、研修中は施設長をはじめとする職員の方々に大変お世話になった。約1週間のあいた研修のみならず生活面についても多くのご指摘や助言をいただいた。施設職員の方々のお力添えがなければ、我々が無事研修を終えることはできなかっただろう。東京と鹿児島という遠距離での研修ということもあり、研修前に施設側と学生側の連携が取れない状況も多かった。情報の行き違いや誤解の生じた場面でもあらゆる場面で寛大な心をもってサポートしていただけた『エスプリ鹿児島あいら』職員の方々には、多くのご迷惑をおかけしたことをお詫びすると共に、学生一同心より感謝申し上げたい。